

## ドンソン遺跡フィールドスクール（2007-2011年）の紹介

西村昌也（金沢大学・国際文化資源学センター・客員研究員）

### A. 問題の設定

ベトナムの考古学研究ならびに遺跡財保護・活用にあたる文化財保護関係者は、国内経済の好況下に押された調査数や施行事業数の急激な増加にともない、もともと分母として多くなかった研究者や関係者の絶対数の不足ならびに能力不足に直面している。また、経済活動の国際化が進展する一方、考古学などの伝統文化財へのアプローチや解釈はきわめて国内的であり、近隣諸国の状況理解は遅々として進んでいない。この原因の一つが研究者や関係者が国境の枠組みでものを考える指向が強いことにある。もともと先史時代などの過去において国境的空間枠は意味のないことが多く、これを越えた思考・実践の枠組みを作り出さなくてはならない。特に、その地理的文化的環境からベトナムは、東南アジアのみならず、東アジアも視野に入れなければならないが、現状では、両地域との具体的な交流はきわめて不十分である。そこで、若い世代の教育と実習を兼ねたネットワーク形成が求められている

### B. プロジェクトの設定

タインホア省タインホア市のドンソン遺跡は2500年前から紀元1000年にかけての大規模遺跡であり、国家級歴史文化遺跡に指定されている。ベトナムの文化・歴史を語る際に先史文化の象徴的存在として、当遺跡やドンソン文化は紹介されている。また、日本でも世界史の教科書でドンソン文化としてとりあげられるほど著名である。しかし、現実には当遺跡の指定は、その最初期のベトナム戦争中の1962年であり、遺跡指定範囲も明確でないまま現在に至っており、現在各種の開発工事の危機にさらされている。

当プロジェクトは、この遺跡をフィールドスクールのベースとして、総合調査方法の教育、遺跡の具体的な保存策確定のための作業実行の実習を行うことにした。

また、交流ネットワークを形成する周辺域国として

は考古学や埋蔵文化財行政が比較的進んでいる、タイと中国（広西・広東）を、交流関係の相手として共同作業を進める地域として選んだ。

### C. プログラム施行内容

プログラムの参加者に関しては、プログラムを組織・実行したり、講義や実習教育を行う指導側（総数12人）とプログラムを受講する受講側は、総数20人、うちタイ人4人）になった。

#### 1. 2007年12月23日から2008年1月15日：タインホア省タインホア市ドンソン遺跡でのフィールド実習プロジェクト

ドンソン遺跡はマー川の右岸域とその裏山の西麓地域に分布している。36㎡の発掘坑を旧Pham Thong寺領であった野原に設定し、層位に基づく丁寧な発掘を開始した。

参加受講者は、考古学院、ハノイ人文社会科学大学、ホーチミン人文社会科学大学の若手研究者、タインホア省博物館、タインホア省遺跡管理班、タインホア市博物館、タインホア市文化通信局などの若手幹部から招聘した。また、タイ・シルパコーン大学からも大学院生を2人招聘した。

講義者と受講者を併せると母語が3言語、そして公用語として英語が入り、4言語の環境でプロジェクトを進めることになったが、ベトナム人のホスピタリティと講義者側の相互扶助で、うまく乗り切ることができた。

発掘自体は、正確な層位的発掘と遺構の正確な処理や記録を優先し、また現場では講義を行いつつ調査を進め、さらには夕方には必ず調査日誌をつけ、さらにはその日の各新認識事項について、質問や意見交換の時間を設けた。従って、調査深度としては非常に遅く、文化層深度約2mのうち1/3にも届かない結果となった。継続調査は来年度に行うことにして、発掘坑の保存のための埋め戻しを行った。

2. 2008年7月25日から8月1日にかけての、タイでの遺跡踏査実習とシルパコーン大学でのベトナム考古学のワークショップ

若手考古学者や博物館・遺跡行政担当者を中心とするベトナム人プロジェクト参加者9人とシルパコーン大学からの本プロジェクト参加者3人とともに、東北タイで先史時代の銅採掘遺跡や大型居住遺跡（バンチェン）、歴史時代の製鉄遺跡や寺院遺跡を踏査し、博物館や遺跡博物館の見学などを内容とするスタディツアーを行った。各遺跡や博物館で詳細な説明をタイ人研究者から受け、また遺跡の理解、保護方法、活用法をめぐり積極的な議論や意見交換を行った。

さらに、7月31日にはシルパコーン大学との共同で、ベトナム考古学とタイの遺跡活用をめぐる新しい試み“村落共同体考古学”に関するセミナーを開き、ベトナム人の若手研究者に自らの研究を発表する場を設け、学術的問題のみならず、タイとベトナムの考古学が共通して抱える問題（遺跡と考古学の市民への理解へのされ方、考古学とアイデンティティーの問題、考古学教育のあり方）についての活発な意見交換を行った。ベトナム人の参加者のほとんどは、海外でのスタディツアーは初めてであったが、タイ側の非常に温かいもてなしも手伝って、企画運営はスムーズに進み、タイ・ベトナム両側からの好評を得た。



ドンソン遺跡での調査実習風景

3. 2008年8月18日から23日にかけての、タインホア省博物館におけるドンソン遺跡の出土遺物整理実習

ドンソン遺跡の発掘で出土した資料に関して、土器、瓦、石製品、鋳型などを中心に、考古学院の若手研究者やタインホア省博物館館員らの遺物のデータ化のための基礎整理作業を指導した。



ドンソン遺跡における夜間の授業風景

#### 4. 2008年12月24日から1月14日にかけての、タインホア省タインホア市ドンソン遺跡でのフィールド実習プロジェクト（第2次）

タインホア省ドンソン遺跡にて、第2次フィールドスクールを行った。参加メンバーはベトナム考古学院の若手研究者、ホーチミン市大学の大学院生、ホーチミン市考古学センター、タインホア省の博物館研究員、タインホア省文化情報局局員、さらにタイ・シルパコーン大学の大学院生3人など計15名に及び、発掘、測量、遺物研究並びに実測などの多岐にわたった。プログラムは西村昌也、Nguyen Giang Haiの指導のもと、Pham Minh Huyenの参加で行われた。

遺物研究や実測の授業においては、西野範子氏の参加を得た。昼間は発掘測量、夜間は遺物研究・実測という日程的にきついものであったが、参加者の熱心な態度により完遂できた。また今回は古環境研究のためのボーリング地質調査など実践的プログラムも加え、内容的により総合的なものとなった。

今次発掘調査は、前年度、L2-5層で確認された方形基壇の正確を確認するため、発掘区の南側半分を残し、北側半分を継続発掘し、さらに発掘区自体を南側に18m<sup>2</sup>拡張する方向に進めた。この結果、発掘区の中心部のL2-7層で周溝が確認された。また発掘区拡張部では大きな板石を使った台座のような遺構が確認された。発掘区北側半分ではL3-4層まで発掘が進んだが、完掘にはいたらず、来年度継続として、埋め戻しを行った。

#### 5. 2009年7月28日から8月6日にかけての、公共考古学シンポジウムと広西壮族自治区と広東省広州市での遺跡の踏査、博物館や埋蔵文化財事業の研修プロジェクト

7月27日に公共考古学に関するシンポジウムをベトナム歴史博物館にて行い、タイ・シルパコーン大学の Surapol Natapintu 教授、University of Longdon の Ian Glover 博士、そして西村が報告を行い、議論意見交換を行った。これには、これまでの若手プログラム参加者以外に、ベトナム考古学会の会員、各大学、博物館研究者が80人近く集まる盛況を呈した。議論の中心になったテーマは、考古学や遺跡保存活用活動が、上（政府・権力サイド）からの動きであるのか、下からの動き（民間レベル）であるのかによ

り、発現の仕方が違うというものである。そして、公共考古学が、近年アジア各国で発展しつつあるのは、民間レベルからの動きに位置づけられるものであり、今後こうした動きがどのように成長していくか、どのような方向性をもつのか、さらには官民間の間においてどのような関係に位置づけられるか見守る必要があるということになった。

#### 6. 7月28日から8月6日にかけての中国での遺跡踏査実習プロジェクト

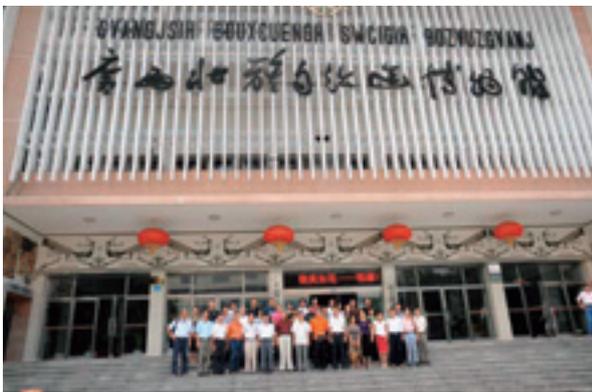
ベトナム考古学院の若手研究者、ホーチミン大学の大学院生、タインホア省の博物館研究員、タインホア省文化情報局局員、総勢20名で、広西壮族自治区の



公共考古学に関するシンポジウム時の風景

広西博物館と広西文物工作研究所、広東省広州市文物研究所の3機関を受け入れ先として、広西省や広東省各地の博物館、遺跡保護区(百色遺跡、南越官署遺跡区、西樵山、合浦漢墓分布地区)、遺跡博物館(桂林甌皮岩遺跡博物館)、各歴史文化史跡などの踏査を行った。広西壮族自治区の首府南寧では、広西博物館にて、ベトナム人若手研究者4人によるベトナム考古学の研究報告を行い、広西側にも漢時代の考古学調査研究の紹介などを行ってもらい、研究者との研究交流を行った。

また、中国プログラムの主目的は、ベトナム人研究者や文化財行政担当者で、実際の中国を知っているものは非常にわずかであり、その知識・経験的落差が両国間の関係者の間で、意志・情報の疎通に繋



中国・広西チワン族、広州市での活動

がっていると考え、遺跡の研究や理解、保護方法、活用法をめぐり、中国研究者や担当者からその実際を学ぶことが主目的として、積極的な議論や意見交換を行った。ベトナム側には2人しか中国語ができるものがおらず、言語上の障害がプログラム効果を低めることを杞憂したが、中国側とベトナム側双方の、努力により、その心配は無用のものとなった。

また、学問上、博物館行政、遺跡保護行政が抱える問題は、ハノイと広州、タインホアと広西各博物館など、非常に共通しており、それらへの対処法はお互いの経験交換により、より効果的に問題解決が図れることが理解できた。

#### 7. 2009年8月10日から8月18日にかけての、タインホア省博物館におけるドンソン遺跡の出土遺物整理実習(第2次)

ドンソン遺跡の発掘で出土した資料に関して、土器、瓦、石製品、鋳型などを中心に、考古学院の若手研究者やタインホア省博物館館員らの遺物のデータ化のための基礎整理作業を指導した。

#### 8. 2009年12月20日から2010年1月12日にかけての、タインホア省タインホア市ドンソン遺跡でのフィールド実習プロジェクト(第3次)

タインホア省ドンソン遺跡にて、第2次フィールドスクールを行った。参加メンバーはベトナム考古学院の若手研究者、フエ大学の大学院生、タインホア省の博物館研究員、タインホア省文化情報局局員など計12名に及んだ。発掘、測量、遺物研究並びに実測などの多岐にわたった。プログラムは西村昌也、Nguyen Giang Haiの指導のもと、Pham Minh Huyenの参加で行われた。夜間講義には、研究で来越中の金沢大学教授中村慎一氏に、中国新石器時代良渚文化の講義をして頂き、プロジェクトの参観もして頂いた。

今年度はプログラムの最終段階であるため、総仕上げ的な内容を込めた。

今年度は旧寺院敷地内で行っている発掘坑(54㎡)の完掘、ならびに遺跡範囲確認のため、Ma川沿いから現ドンソン集落にかけての分布調査と地形測量、さらには8カ所での試掘調査(1地点あたり2-3㎡の調査面積)を行った。また、夜には、調査方法論の講義、遺物実測の実習、遺物復元作業の講義などを、ほぼ毎日行うという密度の高いものと

なった。

地形測量と分布調査、そしてこれまでの発掘調査結果と試掘調査を有機的に結びつけることにより、ドンソン遺跡の範囲確定を行った。その結果、遺構・遺物を包蔵する遺跡範囲はまだまだ広く残っていることが判明した。

プログラム最終日に、タインホア省文化情報局、考古学院研究者、タインホア省博物館、タインホア省遺跡管理局を交えて、ドンソン遺跡は国指定の保護遺跡になっていたにもかかわらず、具体的な範囲指定が行われておらず、今回の調査結果にもとづいて、遺跡の具体的な範囲指定を行うことにした。

9. 2010年3月6日、7日のドンソン遺跡での、国土座標値測量を京都市埋蔵文化財研究所の宮原健吾氏に行ってもらった。
10. 考古学院と筆者は、2010年12月19日から22日にかけて、この問題をよりベトナムの有識者から一般市民レベルに広め、地域的にも全国レベルでの認識にするため、公共考古学の国際シンポジウムをタインホア省で開いた。
11. 2010年12月23日から、2011年1月10日にかけて、ドンソン遺跡出土資料の整理実習を、タインホア省博物館で行った。
12. 今回のプログラム参加者のなかで、代表して幾人かに、自分たちが学んだことに関して、テーマに応じて、レポートを書いてもらった。一般にこうした講義は一方通行で終わることが多く、今後の参考資料あるいは、彼ら自身の復習効果を狙って、文章（英語と日本語）にして提出してもらった。
13. 2011年6月下旬に、社会科学院の助成により、考古学院やホーチミン市の考古学センターの若手研究者を引率して、ラオスへのスタディーツアーを行った。ヴィエンチャンとルアンプラバンでの博物館・遺跡参観が主な内容となった。

#### D. プログラム結果の公表・社会的還元の結果について

1. 2008年8月28日 Tin Tuc 誌で、公共考古学についての紹介を

Nguyen Giang Hai が紹介した。（報告書末尾に添付）

2. 2008年9月23日には、年次考古学会議“ベトナム考古学の新発見”において、当プログラムのフィールドスクールについて紹介報告を行い、大学関係者等の好反応を得た。
3. 2009年7月31日、Tin Tuc 誌上に公共考古学に関するシンポジウムについての紹介記事が掲載された。（報告書末尾に添付）
4. タイの受講生である Pira Venunan が、タイの総合歴史研誌 *Muang Boran Journal* Vol. 35 no. 3 (Jul. - Sep 2009) に、“Six museum in Vietnam”. (タイ語) で、ベトナムの博物館の現状を紹介した。
5. 2009年11月29日  
第19回 Indo-Pacific Prehistory Association の大会（ハノイにて開催）の冒頭 Plenary session において、西村昌也と Nguyen Giang Hai が、ドンソン遺跡での研究と現状を500人の参加者の前で報告した。
6. 2009年12月3日 第19回 Indo-Pacific Prehistory Association の大会のセッション D2 “Archaeological conservation & education in Southeast Asia” において、Nguyen Giang Hai 氏が “Public archaeology in Vietnam” のタイトルで報告し、その中には当プロジェクトの詳しい紹介が含まれている。2009年12月公共考古学に関するセッションで、Nguyen Giang Hai が、ベトナムに於ける公共考古学の取り組みを報告、そしてタインホア省文化情報局の Phan Thi Tuyet によるタインホアでの公共考古学に関する現状と構想が報告し、ベトナムにおいて公共考古学が根付き始めたことを印象づけられた。
7. 2010年12月1日、同じく第19回 Indo-Pacific Prehistory Association の大会において、当プログラムの初年度参加者であるタイ・シルパコーン大学の博士課程大学院生 Pira Venunan と Isaarawan Yoopom が中心となり、本プログラムのベトナム側受講者と組んで、セッション “Generation X” archaeologists in Southeast Asia and the future” を組織し、東南アジアの若手研究者や大学院生のための研究報告セッションを設けた。セッションには西村昌也や Rasmi Shoocondej も

コメンテーターとして参加し、幅広い議論を形成できた。Pira Venuan と Isaarawan Yoopom は、当プログラム参加後、再度自らベトナムを訪れ、自分の研究テーマに即した資料調査を行っていた。当プログラムが意図したタイ・ベトナム間の若手世代による交流ネットワーク形成が結実した好例となった。

8. 2010年12月4日同じく第19回 Indo-Pacific Prehistory Association の大会において、西村昌也と Rasmii Shoocongdej が、“Archaeology without borders in Mainland Southeast Asia”を組織し、東南アジア大陸部の考古学について、国境的枠組みを超えて考えてみようというアイデアで研究発表を組織した。これは、当プログラムの施行途上に参加者間により提出されたアイデアに基づくものである。
9. 2010年1月24日付けの全国紙『人民報』（電子版）に、ドンソン遺跡でのフィールドスクール調査とドンソン遺跡の保存問題についての取材記事が紹介された。（報告書末尾に添付）
10. 2010年3月21日、金沢大学“アジア文化資源学 金沢セミナー”にて、西村昌也が、本プログラムの内容を講演後半部の主要を占める形で、日本、タイ、ベトナム、ビルマ、インドなどからの受講者の前で、報告した。
11. 2012年4月6日に、東南アジア考古学会例会にて、本プログラムの内容も含めて、西村昌也が主に行ってきたベトナムでの公共考古学の活動結果を報告した。

## E. 学術調査結果の要約

本プログラム自体は、遺跡の保護や活用に関して、学術的調査能力をみにつけることを主眼としたもので、学術調査自体が目的ではない。従って、ここでは純粋な学術調査の結果については簡単に報告しておく。また、この学術調査資料に関しては、現在報告書作成のため、鋭意整理中であるが、これらの作業に関しては、トヨタ財団の助成は用いず、報告者などの個人的研究資金等により行っている。

旧寺院敷地内での本発掘地点での学術結果は、これ

までのところ以下のようにまとめることができる。

- 先史時代のクイチャー文化段階（約3000-2500年BP頃から2500年BPころまで）の段階から、居住活動が開始されているが、当初は盛り土を行って、低湿地での居住域を造成していることが明らかとなった。盛り土現象自体は、居住開始期のみならず、その後も繰り返し行われている。
- ドンソン時代（2500年BPから2000年BP）から紀元3-4世紀にかけては、本発掘拠点での居住の証拠となる遺構などは、検出されなかった。紀元2～4世紀の遺物は発掘区内から出土しており、その頃に近くに居住活動があったのは妥当と思われる。
- 5-6世紀に環濠に囲まれた方形基壇建築が出現する。その後、9世紀頃に、方形基壇直上に大きな板石を使った石組み遺構が出現する。またその前後の時期に大きな柱穴を伴った建築も存在していることが明らかとなった。そしてこうした建築や石組み遺構は10世紀頃に放棄されている。その放棄された建築遺物群の中には青銅製仏像の手の破片と鋳型湯口部破片などが出土していることことから、5-6世紀以降の建築遺構が仏寺であると推定される。
- 発掘地点は、11世紀以降ほとんど使われることはなかったが、17世紀に舟形木棺墓が一基造成されている。
- それぞれの試掘地点では、マー川側の北方で、ドンソン時代の居住痕跡や埋葬が確認された。また南側では2-3世紀以降10世紀前後のころまでの居住痕跡が多いことが確認された。時期によって、居住範囲がかなり異なることが明らかとなった。

## F. プログラムの結果・総括

周知のように、ベトナム社会は1990年代半ばより急速な経済発展と、それに伴う社会変化を遂げつつある。考古学あるいは埋蔵文化財行政界もその波に呑み込まれており、盗掘や遺跡破壊の活発化、土地開発に伴う緊急発掘調査への圧力、緊急発掘調査活発化に伴う考古学者や埋蔵文化財行政担当者の力量不足や人材不足などが露呈するようになった。その一方、発掘などにより土の中から未知のものが出てくるという新鮮さや文献史学が明らかにしえないような物質文化上のダイナミックスさは、社会に驚きや興味を持って迎えられている。

こうした考古学や埋蔵文化財行政担当者がおかれて

いる状況を少しでも改善することを狙って始めたが本プログラムであった。考古学さらには遺跡保護などの埋蔵文化財行政は、実務能力あるいは具体的な問題処理能力がないと全く人材としての意味をなさない。これはベトナムでの在任歴が長い報告者が、日本、ベトナム、東南アジア各国、そして欧米諸国のインテリと呼ばれる数々の人々とつきあって得た単純な結論である。ベトナムのみならず、各国でどれだけこうした能力を欠いた、あるいはその適正をかけた人材が、社会の上層あるいは組織や機構管理の場に多くいるかをみてきたからである。この問題を引き起こす最大の原因は、教育の内容やシステムにある。ベトナムの場合は、大学でいかにつまらないインテリ教育を行っているかは、報告者のみならず、ベトナム研究を行う人間にとって公然の秘密であろう。本プログラムの共同主催者である Nguyen Giang Hai 氏は、早くからこの問題を認識していた人であったので、彼と共同してプログラム内容を作成し、その主眼を人材育成に据えることにした。

### 1. フィールドスクールの効果

まず、発掘調査結果自体をここで詳しく報告することは、本報告の目的ではない。ここでは、フィールドスクールの教育面あるいは実行面でどのような成果や効果があったかを述べる。

まずは、非常に丁寧な調査方法を行い、それをわかりやすく現場で方法論や学術的認識の議論を行うことにより、調査方法のゼミとなったことである。ベトナムの場合、大学などでは先生が述べた意見が一つの絶対的考えとなる場合が多く、生徒はそれをノートに写して終わりという場合が多い。そのような一方通行の授業はやめて、ここでは参加者側の疑問提出や議論に時間をさき、それに対して、授業者側が丁寧に答えを提出あるいは説明するという型式をとった。そのため、調査に割ける時間が少なくなってしまうが、この方法を最後までとることにより、参加者側の学習態度と意見交換に関する積極姿勢を呼び込むことができた。また、現場で意見を交換するということがいかに、遺跡の研究や保護行政において必要であるかということが参加者のもとで痛感されたことも大きな成果である。わからないことの原因、あるいは問題の根源は常に現場での作業や研究で解決を図れるということが認識された。

また、第1回と第2回はタイのシルパコーン大学から大学院生・学生を招聘・参加してもらい、これによ

り英語をひとつの共通語とする土壌が生まれた。ベトナムのインテリは概して、英語への適応力がまだ弱いですが、考古学の場合、身振り手振りや実際の作業を交えることにより、比較的簡単に英語でコミュニケーションを図ることができる。このプログラムに参加したベトナム人参加者のうち何人かは、その後自発的に英語学習プログラムや海外での講習プログラムに参加しており、英語による考古学活動にたいする精神的障壁を壊すことによりかなり成功したと思う。

### 2. 相手を助けることにより自分が進歩する

また、当フィールドスクールにおいて配慮したことの一つに、参加者どうして助け合って学ぶという方法である。所属機関やその専門、就業年数、さらには卒業した学科の違いにより、各参加者の能力や問題意識は大きく異なる。そこで、各人の能力に応じて、分野や作業に責任者をおき、その責任のもと、わからないことは互いに教え合うようなシステムにした。個人指向の強いベトナムでは、他人の利になるような形での知識供与や経験委譲は余り好んでしない。しかし、考古学も埋蔵文化財行政もチームワークが欠かせない。そのためには自分ができることは他人にもできるように条件作りを手伝い、経験や知識委譲を積極的に行うようにせねばならない。

この問題は、実は外人研究者とベトナム人研究者の間にも見られる。一般的に研究条件や受けた教育内容の高い外国研究者の方が、学術研究能力において勝っている場合がまま多い。しかし、それは、決して個人の能力の高低の結果ではなく、むしろ出身国や出身大学などの“格差”に起因することが大きいと報告者は考えてきた。従って、そのような先天的条件や環境的格差は、研究者間の努力で払いのけられるべきというのが持論である。特に若い世代の研究者には、そうした配慮があってしかるべきと考えてきた。そうしたことも、当プロジェクト起動の大きな理由になっているが、意外にこうしたプログラムに関心をもつ日本人東南アジア研究者が少なかったことは気になる問題である。自分あるいは自分と関係する人たちの研究（仕事や知識と言い換えても良い）の進歩にしか関心が無いというのであれば、最終的には自身の研究レベル低下につながるということを明言しておきたい。研究は切磋琢磨しなければ、向上しない。もし、自身の研究レベルを上げたいなら、積極的に相手あるいは他者の研究レベル向上に投資・協力すべきである。これは、今

プロジェクトを通じて、参加者への教育活動や議論を通じて、報告者自身が強烈に認識したことである。

### 3. 人的ネットワーク強化に成功

2007年12月から始まったドンソン遺跡でのフィールド調査スクールやタイでのスタディツアーは、やや手探り状態で始めた感があるが、共に非常に好評で、第2回、第3回共に参加者が増加した。そのため、予算的に厳しい状況におかれたが、スクール実施側の諸経費を一部自弁とし、参加者の経費（現場での生活費など）を極力抑えることにより、経費削減に努めた。

また、8日間12名でのタイスタディツアー、10日間20名による訪中スタディー・ツアーの実施にあたっては、本プログラムをみの助成金経費ではまかなえず、東南アジア埋蔵文化財保護基金からの負担、西村昌也自身の経費捻出、ベトナム人研究者からの一部持ちより、そしてなによりもタイ・シルパコーン大学の参加・支援、広西文物工作研究所、広東省広州市文物研究所の財政的支援があったからこそ可能となったことを記しておきたい。

しかし、逆にこうした経済的にきつい条件をいかに乗り越えるかということで、団結や様々な交渉が可能となり、それらを通じて、関係諸機関や参加者、支援者に対する真の感謝の気持ちが強まったのはよかったと思う。そして、こうした国境を越えた大学・研究機関・研究者の協力関係（ネットワーク）は、今回のプロジェクトを通じて一気に醸成された感が高い。これは、単に研究機関の組織上の関係にとどまらず、その後各研究者間で個人的な連絡や研究協力関係が進行していることから、それぞれの各研究者レベルでの関係が個人的に深化されたことがわかる。

実際に、プログラムに参加したタイの大学院生が、個人的にベトナム調査を行ったり、シルパコーン大学側からベトナム研究機関側へ、タイでの調査参加への招待が行われたりしている。また、広西壮族自治区側とベトナムの研究者間で情報交換が進んでおり、この良好で密な関係は、今後ますます強化される方向にあると思う。今後は、西側の隣国であるラオス、カンボジアとの連携関係の強化にも力をいれてみたい。

当プログラムを通じて、ベトナムの考古学者、マスコミ、有識者の間に、考古学には学術研究としての役割と市民や社会に調査結果や学術情報を還元する社会的役割（公共考古学）の二つの立場があることが、新しく認識されるようになったことは、大きな成果だと

思う。後者は、今後ベトナム社会での考古学の発言力の背景にもなっていくであろう。

### 謝辞

筆者が2年間お世話になった国際文化資源学研究センターは、今後ベトナムで、フィールドスクールを実行されると聞いた。おそらく、そのモデルは当プロジェクトと思われるので、今後の役に立てばと考え、トヨタ財団に提出した報告書を加筆、改変し、プロジェクト内容を紹介した。

最後に、ここにあらためて、今回のプロジェクトに助成をしてくださったトヨタ財団に心からのお礼を申し上げます。このような国境や組織を横断した人材が集まり、なおかつ地道な教育プロジェクトというのは、時間がかかることもあり、なかなか助成を得にくいのが現実である。報告者などが依拠する世界においてもこうしたテーマで研究資金を得ることは、日本でも東南アジアでも容易ではない。助成の機会を与えてくださったことに、本当に心から御礼申し上げます。